▲Mirage 5 BD 09 Restoration Groupの主要メンバーとBD 09。メンバー全員がミラージュ戦闘機の元パイロットもしくは整備士。写真右がこのグループの代表マルセル・デ・ペッター氏、右から2人目がオーナーのジャック・ウォルディアー氏

Mirage 5 BD 09 Restoration Group Sint-Truiden/Brustem,Belgium

ミラージュ5 BD 09の復元に懸ける男たち

Photo & Tet：Junji Sato

ベルギー北東部リンブルグ・リージョナル空港にはミラージュ5を修復しているグループが活動している。彼らは同空港で修復した機体をベルギー空軍旧ハンガーの一角に展示。メンバーはベルギー空軍OBで、展示されているミラージュ5は個人所有でありながらほぼオリジナルの状態を維持している。その公開は注目を集めたが2020年2月以降、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い活動を制限。逆境にあっても魅力的な情報を発信し続ける様子を紹介したい。

ミラージュ50周年を記念して

ミラージュ5 BD 09（製造番号209）は1971年2月11日ベルギー空軍に引き渡され、同年3月25日にベルギー南西部の防衛のため、フロレンヌの第8航空団に配属された。同年12月にはビエルセ（リエージュ空港）基地の第1航空団（Thristel）に配置転換され、1986年に再度ビエルセに戻り第2航空団（Comet）および同基地内の第42航空団（Mephisto）にも配属されて、計4個の航空団で運用された。

同機は1994年1月13日の最終フライト後、オランダと国境を接するウェールデ空軍基地で保管され、その後、フランスの軍需エレクトロニクスSagem Companyに売却された。そしてボルドー近郊のラ・テスト・ド・ブッフェ空軍基地に移設。

2015年3月、ほぼ完全な状態でBD 09と対面した“Mirage5 BD 09 Restoration Group”（以下、復元チーム）の現代表マルセル・デ・ペッター氏は「ミラジスト（Miragist：ミラージュ愛好家」のために同機の購入を検討し始めた。目的は、ミラージュ5がベルギー空軍で運用された1970年から50周年の節目となる2020年にこの名機を一般公開することだった。

多彩なアイデアでリピーターを楽しませる

フランスからの搬送手続きに時間を要したため、BD 09がリンブルグ・リージョナル空港に到着したのは2018年2月1日となった。機体は早速専用ハンガーに運ばれ、1年後に公開で

▲2019年2月1日、プレス発表時に披露されたMirage5 BD 09。旧ベルギー空軍時代の古いハンガーで1年間、修復作業を行った。この空港は第二次世界大戦時、対フランス侵攻の支援基地としてドイツ空軍に利用された場所で、戦後はベルギー空軍の要撃基地となった。軍備縮小計画により1996年以降、旧ブルステム空軍基地はリンブルグ・リージョナル空港として運用されている

▲2020年1月に改装工事を終了させ、オープンした新ターミナルのドローンポートへけん引される50周年記念塗装のBD 09。新型コロナウイルスの感染拡大に伴いパーティはすべて中止された

きるよう修復作業が始められた。そして2019年2月1日、関係者、プレスを招待して公開、以降も定期的に一般公開をして、記念グッズの販売などにより資金を集める日々が続いた。

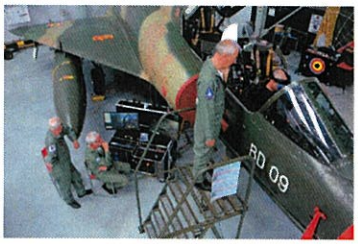
復元チームのメンバーは別の集客プログラムも打ち出した。まずミラージュ5パイロット協会（Mirage 5 Pilot Association）の協力を得て、ミラージュに関わったベルギー空軍退役軍人への呼びかけを行った。これに応えて多くの退役軍人とその家族が50周年に向けた食事会や撮影会などに参加した。

ファッション誌の撮影に機体を貸し出し、若い世代に向けてアプローチすることにも挑戦した。この活動はレンタル料で運営資金を確保できるメリットがあった。しかし、その効果は一過性のものであり、見学者を発掘し、リピーターを増やすためのプロモーションは別途必要となった。そこで彼らは継続的な運営資金の確保に向けた新しいプログラムを2020年2月に発表。

◀「COVID-19を撃墜」と書かれたオリジナルパッチ。5,000枚が1週間で売り切れた

それが3Dバーチャルフライトを体験できる「ミラージュ・センセーションフライト」だった。離陸から空中機動、戦闘、そして着陸までを20分間の仮想空間にまとめ、ミラージュの空中機動と飛行性能の高さを体感できる飛行シミュレータである。このシミュレータを開発、公開すると、瞬く間に話題となった。本来は50周年記念式典で発表する計画だったが、新型コロナウイルスの感染拡大により計画を変更せざるを得なくなったのだ。この件について代表のペッター氏は次のようにコメントしている。

▲BD 09のコクピット。オリジナルに保たれている操縦席



▲ミラージュ戦闘機の性能の高さを体感してもらうために開発した3Dシミュレータ「ミラージュ・センセーションフライト」。現在は1フライト12分の体験版を1人€20で提供、離陸から空中機動と戦闘、着陸まで体感できる。2021年春には、実在するベルギー空軍の基地からの離発着、コルシカ島への遠征フライトと模擬空中戦などさらに新しいプログラムが組まれる予定

米軍機と比べると日本ではなじみが薄いフランス製ミラージュ。1945年から始まる「冷戦期」において欧州各国はアメリカとの関係強化を模索し、主としてアメリカ製戦闘機を採用した。つまりフランス製戦闘機はそうした時代背景による政治的配慮で、母国フランスをはじめイスラエル、アルゼンチン、パキスタンそして東アジアの一部の国で採用されるにとどまったのである。

このダッソー製デルタ翼戦闘機をフランスが中心となって開発した理由は、複雑な工法を使用せず後退角を大きく取ることができるため、遷音速域での空気抵抗を小さくし、瞬発的な高速性を発揮するのに有利であったことがまず挙げられる。そして、機体の小型・軽量化が容易で、大きな翼面積を取ることもでき、高迎え角飛行時でも失速し難いという利点があった。

その結果、アメリカやソ連（現：ロシア）製の戦闘機と比べても高速域での運動性には卓越したものがあり、1967年6月から始まった第三次中東戦争、1973年9月から始まった第四次中東戦争では「固定翼」を持ったミグ、スホーイ戦闘機との空中戦における本機の優位性が、その撃墜数により世界に示されることとなった。

ベルギー空軍は小さな国土の防衛に必要な「運動性と加速力」を担える攻撃戦闘機として、1968年2月16日にミラージュ5戦闘機を採用。1970年から単座型の5BA 63機と偵察型27機（機首の形状が通常型と異なる）、複座型の5BD 16機の計106機を配置し、1993年末まで運用した。

▲現役時代のBD 09。1981年9月にブルステム（Brustem）空軍基地で撮影されたもの

▶2018年2月1日、ミラージュ・パイロット協会（MPA）の働きかけもあり、元パイロット、整備士、報道関係者など多くの人が見守るなかフランスから陸路で運ばれてきたBD 09

「このプログラムをスタートしてからBD 09クラブのメンバーが増えている。2020年現在で1,905人だ。今後もチーム内でいろいろなアイデアと参加者の声を反映したプログラムをつくりたい」

最終目標は「地上滑走」

2020年は記念すべき50周年となるはずだった。それがコロナ禍によりBD 09展示会の内容を制限し、盛大な記念式典をはじめいくつかのプログラムが実施できなくなった。

現在はエンジンを稼働できる状態にないが、2年以内にはエンジンランをしたいと復元チームは資金を集め、地上滑走を披露する夢を抱いている。

ペッター氏は第8航空団（Blue Cocotte）の教官としてミラージュ戦闘機を18年間操縦したパイロットであり、BD 09に乗務した経験もある。また、復元チームにはミラージュの元整備士もいる。地上滑走の夢は決して夢ではない。

しかし、機体本体の維持費やハンガー使用料などの出費はかさむ。感染予防のため見学者の人数制限をする状況下で、少しでも資金を得るために多彩なオリジナルグッズの通信販売も行っている。地域の人々や退役軍人、協会関係者の「口コミ」による宣伝、サポートもあり、彼らの活動は「低空飛行」ながら維持できている。2021年も多難な年になると予想されるが、ミラジストの心を掻きたてる2年後の「エンジンラン」に期待してやまない。

Mirage5 BD 09 Restoration Group

住所：Lichtenberglaan 1090 3800 Sint-Truiden, Belgium
ホームページ：
https://www.mirageBD 09.be/
FaceBook：
https://www.facebook.com/groups/190939791496166/